

ペシャワール会報

No.73



2002.10.29大塚

表紙をめぐる小さな物語 ジャネ・ハラバタム

ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区
 大名一丁目10-25 上村第二ビル三〇七号
 電話 〇九二(七三二)二三七二
 FAX 〇九二(七三二)一三三三

戦禍の大地に緑と平和を取り戻す	中村 哲
高山病と闘いながらの診療でした	仲地省吾
紙幣(ルピー)を数えて鼻が痛い	中山博喜
パイロットファームは収穫のまっ盛りです	橋本康範
青空と砂ぼこりの日々	長嶋 透
NGOの仕事とは何かを考えています	目黒 丞
今こそスタッフの基礎トレーニングを	藤田千代子
魅力あるパイロットファームを目指す	高橋 修

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

———— ペシャワール会インターネット ————

ホームページ <http://www.lm.mesh.ne.jp/~peshawar/>

電子メール peshawar@mx.mesh.ne.jp

戦禍の大地に緑と平和を取り戻す

「緑の大地計画」試験栽培スタート

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長 中村哲

主力として頑張った現地スタッフ

みなさん、お元気ですか。

二週間前にアフガンistanから帰り、この一年の出来事を振り返りながら、静かに今後のことを考えています。「今後のこと」と言っても、本質的にはこれまで通りなのですが、アフガン空爆以後のめまぐるしい内外の情勢に振りまわされ、めまいから立ち直りかけているところです。

ある程度予期していたとはいえ、昨年九月以後の動きは、私たちに能力以上の努力を強いてきました。まるで十年の時が流れたかのように思われます。本当にさまざまなことを改めて学ばされました。しかし、その多くはこれまで見聞きし、感じたことの再確認でありました。

世界には現実の虚像しか伝わらないこと、人間はどうしようもなく愚劣であって、自分の中で作り上げた小世界に基づいてしか生きてゆけないこと、傲慢と暴力、目先の豊かさとかナゲが世界を破壊しつつあること。そして、この自己破壊的な愚さが、今や最終局面に近づいていること……様々な

なことを心に巡らしました。

とはいえ、日本側ペシャワール会・現地側PMS（ペシャワール会医療サービス）双方の奮闘は、これまでになく目覚ましいものがありました。事務局は一桁異なる事務量をこなさねばならなかったし、現地は現地で、訪問者やワーカーが増加、仕事の質量共に膨大となり、多大の努力を強いることになりました。と言っても、決して日本人だけが活躍しているわけではありません。損得を抜きに、時には身を危険にさらしながら行われたアフガン人とパキスタン人の協力、実は彼らが主力なのです。現地では、昨年にも増して拡大する長期事業に備え、大きな構造的な変化を経過しています。ここに「緑の大地」計画の一端を伝え、会員各位のご理解を得たいと存じます。

会員は三倍増、現地もテコ入れ

案の定、アフガン報道は次第に遠のきつつあります。あれだけ世界を騒がせ、よく観れば多くの知恵をもたらしたに違いない「アフガニスタン」は、未消化のまま、忘れ去られてゆくであります。それでも、幸いなことに、ペシャワール会



試験農場を視察する中村医師ほかPMSスタッフ（手前列左から目黒、橋本、藤田、中村）

は多くの理解者を獲得して、現在会員一万一千名、募金は一年で十億円に迫り、次のステップを大きく踏み出しました。具体的には、「緑の大地」計画に着手し、問題解決の範を示すべく、今後十年を目標に歩み始めました。医療活動はこれまでどおり実施されますが、これに水源・農業が長期取り組み事業として加わりました。

目立たないけれども重要な出来事として、人事刷新がありました。現地事業は、これまででさえ、私一人では到底、成り立ちませんでしたが、地域、分野共にさらに拡大したこの二年間は、特にそうでした。そこで今年四月から、PMS（ペシャワール会医療サービス）病院長代理に、現地十二年

の経歴をもつ藤田千代子看護長を戴き、誠実かつ勇敢なイクラム事務長、ジア副院長がこれを補佐する形で、現地PMSの要が固められました。ジャララバード水事業では、ややもすれば分離割拠しやすい弊風を克服して、臨時態勢から長期態勢へと脱皮しました。今春以来、嵐のような国際援助ラッシュがカブールに集中し、高給に惹かれてPMSを去った職員は、医療関係二九名、水関係一六名に上りました。私たちとしては、これは人を見る良い機会だとして静観し、現在残った者でおもむろに態勢を立て直しています。この結果、PMS職員は、医療関係一八〇名、水関係九五名に減りましたが、機能は充実しています。ジャララバード事務所は、七月より目黒を院長補佐とし、ディダール技師を技術的指揮者として、再編成されました。

日本人ワーカーも増員されました。一月からわずか十ヶ月の間に、十数名が来ています。ただし、慣れるのに時間がかかるので、一年以上を受け入れ、三ヶ月間は様子を観察して決めるという方式を徹底し、「ボランティア」という名前を廃止しました。世に流行る安直な印象を払拭するためです。

オキナワ平和診療所

医療関係では、カブールの五つの臨時診療所を六月に閉鎖、アフガン東部に集中するようにしました。これは「援助ラッシュ」がカブールに殺到したこと、事業の拡散で疲弊したPMSを立て直すためでした。また、アフガン内診療所の新築に

とりかかり、分けても現在米軍が終結しているクナール州のダラエ・ピーチでは、沖繩県民の厚意と共感を生かし、住民たちと協力、「オキナワ平和診療所」(第一回沖繩平和賞の浄財が建築費にあてられる)として強化されようとしています。「江戸の仇は長崎で」ではありませんが、彼らの暴力主義と前線に対峙することになります。土俵はこちらのものですから、邪魔さえなければ、遅くとも来春までに完成の見通しです。

飲料水の方は、最も早魘の被害が甚だしかったニングラハル州に限定、今も変わらずに作業が継続されています。九月三十日現在、総作業地八五四、うち利用可能な水源を得たもの七七四、一見作業地数の伸びは鈍っていますが、内容は充実しており、最深七八メートルの手掘り井戸が記録を更新しました。しかも下がる一方の水位との戦い、カブールのNGOラッシュで人材が引き抜かれ、虎(米軍)の威を借る軍閥の脅迫、無政府状態の中です。加えて、例によって陰謀、内紛、裏切りと、一時はPMSのジャララバード事務所は分解のふちまで立たされました。しかし、ペシャワールPMS基地病院の大幅なテコ入れで、人事を全面刷新、改革を断行してよく立ち直り、必死の作業が続けられています。

農業用水の獲得へ「大井戸」に着手

さらに重要なのは灌漑用水の獲得です。最初に私たちの診療所が置かれたダラエ・ヌール渓谷では、これをモデル地区とし、早魘被害で砂漠化した下流域を中心に、灌漑用水の確保、農業生産を

上げる試みが始まりました。昨年すでに三十のカリーズの再生によって、中流域の村々(約一万五千人)が辛うじて生き残ることができました。だが、下流の村(ソレジ村、ブディアライ村)は砂漠化のため壊滅、ほぼ無人化していたところ、約八千名の「帰還難民」が戻ってきました。いや、国際機関の早計な帰還計画によって「戻されてきた」という方が精確でしょう。この途方にくれる帰還難民に希望を与えたのが、我々の手がけた「大口径灌漑用井戸」です。昨年六月に着手していましたが、今年七月になってやっと給水を始めました。少し長くなりますが、説明が要ります。「灌漑用井戸」などと述べれば、おそらく大方の日本人は、大農園のボーリング井戸を想像されるでしょう。しかし、そんな大それた機材を搬入することも、維持することも難しい地域です。

私が途方にくれて思案していたのが一昨年の話。村から一kmほど向こうにクナール河という大河が流れています。村はこの川の水位から約三〇〜四〇メートル高いところにあるので、川床の水が豊富なら強力な水圧がある筈だ。その深さまで掘り進めば、必ずや水を得るだろう。器械がなければ、手で掘って、人力で汲み上げればよい。専門家は笑うであろうが、それ以外にないなら、苦肉の策でやるべきだ。……との判断で始めたのです。

しかし、ダラエ・ヌールに貼りつけになる日本人担当者が居ず、この計画はしばらく私の夢に出るだけでした。そこに、一昨年十二月、現責任者の目黒が専従で来ました。しばらく放置して様子を見てみると、現場を取り仕切っていた現地出身

のPMS職員・ヨセフと仲良くなり、案外地元によく溶け込みました(ちなみに、普通の日本人ワーカーなら、このあたりで頭が変になるのですが、彼は我流で現地のパシュー語を覚え、任務を楽しくこなしていました。PMSは他のNGOと異なっており、手とり足取りのガイダンスをしません。地元の言葉で言えば、「神の思召しによって」目黒という人物が来たのです)。そこで、昨年六月、彼とヨセフの監督の下、思い切って開始させたのでした。

作業は空爆下も続けられ、昨年十月に水が出ました。だが、問題はいかに水深をとるかでした。飲料井戸の掘削に使う排水ポンプでは間に合いません。地面が現れる前に、すぐに水が溢れてくるので、掘り進めないのです。それほど水量が多かったです。これを考えたのは、素人のヨセフでした。「大きなポンプが手に入らないなら、ポンプを四台か五台で、一度にやったら」との意見でしたが、自分を専門家と思っている人々は笑いました。しかし、目黒が彼を支持してポンプを調達し、四台を備えて一気に汲み出すことができ、掘り進みました。これで水深を十分にとることが出来ましたのです。

大井戸五基で八千名を養う

かくて苦心惨憺、出来上がったものが、直径五メートルの手掘り大井戸。深さ一八・七、水位四・五メートル。要するに、井戸のお化けです。掘り出した土と巨岩で、要塞ができるほどの小山となりました。

「上空から見れば、おそらくミサイルの発射口か地下壕の入り口に見えるだろう、よく米軍が爆撃しなかったもんだ」

「いやなに、上手く井戸底の真ん中に命中すれば、巨礫粉砕の作業の手間が省けたかもしれないぞ、などと冗談を言い合いました。

実際には、川床の水位に達する前に、上層の地下水脈に達したのですが、これは大成功でした。常時貯水量が三〇トン足らずですが、水の湧出する面積が一〇八平方メートル、汲んでも汲んでも湧き出します。排水をした直後に底に降り立つと、「岩清水」という言葉がびつたり透明な水が、四方八方の巨岩の壁のすきまから流れ落ちていきます。上から見ると、これが「水の色」かと思える見事なコバルト・ブルーです。相当な水量であることは間違いないさそうです。結局、目黒と地元技師デザイナーとの発案で、強力かつ石油消費の少ない単純構造のタービン・ポンプを取り付け、給水が始まりました。この一基の井戸で灌漑できる面積が約二〇ヘクタール(二〇町)、小麦やトウモロコシなどの乾燥に強い作物なら千数百人を養うことができます。

七月の給水開始以来、その成果のほどは目を見張るものがありました。九月二十日、私が訪れた頃には、三方月前まで一木一草なかった干割れた田畑に、見渡す緑が広がっているではありませんか。この季節は主に綿とトウモロコシが作付けされます。農業担当の橋本が診療所で試験農場の収穫祭を祝った後でしたが、なにしろ村人たちが絶望する中で得られた天からの贈り物です。焼きた

てのトウモロコシの味は、また格別でした。

すでに六月段階で私の指示に従って、目黒・ヨセフのコンビが他に四カ所、次の候補地を選定していました。これは、主食である小麦の作付けが十一月なので、何としてもそれに間に合うようにとの配慮でした。七月には第二号が水を出し、九月には第三号も完成間近でした。計五基あれば、優に八千名の村人を養える見通しです。かくて冬越しの準備はまりました。

「乳牛八千頭……最低七年かなあ」

農業と共に、乳牛の導入が検討されました。アフガニスタンは乳製品が日常的に食される国です。この日本側担当者が稲田・高橋の両氏です。「長老」というのはまさにこういう方々を言うのでしょうか。共に農業指導員として粘り強く実績を上げてきた方です。一年や二年は時間のうちに入らない。今年駄目なら来年、自然の理に適わねば長い目で見て結局ダメだ、というのが農業です。「ダラエ・ヌール渓谷に乳牛八千頭」と聞いて、「どれくらい(月日)かかりますか」と尋ねると、「上手くいって最低七年かなあ。いや、それ以上」とのご返事、私も納得しました。

思えば、牛もまた生物、餌が要るのは当然です。それが数年来の早魃のため、九割が死滅、辛うじて生き残った牛は、死ぬ前に肉牛として売りとばされました。飼料の問題を無視して「牛を配るプロジェクト」だけ突出できないのです。実際、援助として配られた牛は、大半が売りとばされています。私たちは(一)先ず水を出す、(二)農業

を可能にして飼料が出来るようにする、(3)これに見合うだけの乳牛を配布する、という方針で徐々に増産する計画でいます。といえは、「当たり前だ」と皆が言いますが、その当たり前でない「復興支援」が行われているので、私たちも困っています。

灌漑用水が整備されるという前提で、高橋・稲田氏が指示された準備は理に適ったものでした。先ず飼料を土地に合ったやり方で確保することです。それも、お金をかけず、誰にでも真似できる単純な方法でなければなりません。アフガニスタンでは冬の飼料に秋とれたトウモロコシの茎や葉を与えます。しかし、これは栄養価が極めて貧弱だそうです。そのため、乳牛は非常にやせ衰えています。日本の牛の半分以下しか体重がないそうです。稲田さんの皮算用では、まともに飼育すれば四倍の乳がとれる。自給自足でできるだけでなく、他地域に乳製品(チーズ、ヨーグルト)を売ることができると言います。これには私も飛びつきましました。栄養失調で次々と死んでゆく子供たちを見てきたからです。

現在、ペシャワール会IPMSはこの地域に八千平方メートルの試験農場を持っており、食糧増産のための地味な取り組みが行われています。ここでの課題のひとつが、冬の飼料の確保でした。ソルゴという、トウモロコシに似た植物が植えられています。これを幾度か刈り取って、簡単なサイレージを行います。つまり、プラスチックのシートでくるんで、地中に入れます。これだけです。すると、何ヶ月かすると内部が醗酵し、牛にとつ

資料1 水源確保・作業地の推移

		ダラエ・ヌール溪谷			ソルフ ロッド郡	ロダト郡	カイバル 峠	アチン郡	総作 業地	うち利用可能水源			
		井戸	灌漑井	カース [*]						総数	井戸	カース [*]	(完成)
2000年	7月3日	10			-	-	-	-	10				
	8月1日	15		7	-	-	-	-	22	29	13	16	2
	8月23日	15		19	30	-	-	-	64	29	13	16	3
	9月10日	15		19	113	-	-	-	147				
	10月5日	18		25	204	-	-	-	247				
	11月1日	35		28	229	-	-	-	292				
2001年	12月9日	35		30	284	-	-	-	349	204	177	27	78
	1月9日	42		35	278	-	-	-	355				
	2月4日	42		34	296	-	-	-	372				
	3月10日	43		38	303	-	-	-	384	309	279	30	162
	4月7日	47		38	304	49	-	-	438	358	329	29	192
	5月20日	51		39	304	103	-	-	497	411	380	31	219
	6月10日	53		38	304	127	-	-	522	472	441	31	244
	7月5日	59	1	38	306	160	2	-	566	504	469	35	320
	8月9日	59	1	38	320	180	2	-	600	512	480	32	380
	9月9日	59	1	38	321	200	2	29	650	549	521	28	399
2002年	11月16日	59	1	38	321	201	2	36	658	603	573	30	455
	2月20日	81	1	38	323	202	2	52	699	558	530	28	429
	3月14日		1						731	578	550	28	
	4月14日	86	1	38	323	202	2	117	769	642	606	36	411
	5月19日	94	1	38	322	202	2	144	803	648	612	36	473
	8月12日	103	2	38	322	202	2	174	843	709	672	37	
	9月30日	117	5	38	320	202	2	170	854	774	741	33	676

*再掘削49ヶ所



ダラエ・ヌールの灌漑用大井戸

て非常に栄養価の高い食物になるそうです。

自立した農村の回復を

こうして現在、ダラエ・ヌール渓谷では、医療から始まって、飲料水、食糧問題に至るまで総合的な取り組みが始まりました。私たちは決して、「アフガニスタンを救済する」などと大きなことは言いません。その日その日を感じて生きられる、平和な自給自足の農村の回復が望みです。今アフガニスタンでは、確かにカネやモノが不足しています。立派な校舎や病院ありません。自動

車もないし、電気もありません。しかし、それが本当に不幸なのでしょうか。彼らが最も切実に望むのは、誰にも依存せぬ村々の回復です。鋏も握っていない外国人が農業支援を行うことはできません。カネをばら撒いても、農産物は増えません。また、カネがないとできない農業は、現地にむいていません。さらに、教育の破綻しかけた国が教育支援をするなど、冗談にもほどがあります。現地のことわざには、「アフガニスタンではカネがなくとも食っていける」と言い、「アフガン人に半人前はいない」と言います。これが私たちの合言葉でもあります。精神はカネでは買えません。この独立不羈の気風がアフガニスタンの屋台骨です。目先の利にさとく、強い者には媚び、衆を頼んで弱い者に威丈高になるのは、見苦しいことです。自分の身は針でつつかれても飛び上がるが、他人の身は槍で突き殺しても平気。かつて日本では、こういう者は嫌われました。でもこれが、今風の「国際社会」や「先進諸国」のようです。その武力の強大さは、刃物を持った狂人とでもいうべく、とうてい文明人の習うべき姿ではありません。交通や通信手段ばかりが発達しても、伝える中味のない社会は、所詮、浮き草のように漂うに過ぎません。巧みだが実のない空論や、付和雷同する幼稚な気風だけが、徒にはびこるだけです。最近、あるイスラム教国の首相が、「日本は我々の手本でなくなった。反面教師として注目するのみ」と断言しました。これは、真剣に受け止めるべき忠告だと思えます。他人に映る自分の姿はなかなか気づかないものです。

めまぐるしい一年でしたが、かくも容易に世界中が欺かれるとは、思ってもみませんでした。「文明国」のお里が知れ、先がおよそ見えてきたようです。せめて私たちだけでも、騒々しくも軽々しい世の流れに惑わされず、しっかりと二本の足を大地につけ、黙々と歩み続けたいと思っています。



中村哲

(なかむらてつ)

九州大学医学部
卒。専門は神経
内科（現地では
内科・外科もこ
なす）。国内の診

療所勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。以来十八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、主に貧民層の診療に携る。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設、パキスタン山岳部に三つの診療所も併せ持つ。一九八六年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガン無医地区山岳部に三つの診療所を設立して、アフガン人の無料診療にもあたっている。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、辺境山岳部へも定期的に移動診療を行っている。

二〇〇〇年からは中央アジア、特にアフガン国内を襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。2000の水源地確保を目指す）事業を実践。さらに今春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地」プロジェクトに着手。年間診療数約28万人。

*ワーカー通信

高山病と闘いながらの

診療でした

PMS医師

仲地省吾

嬉しいニュース

九月三日に三十九日ぶりにラシュトの診療所からペシャワールに戻ってきたら嬉しいニュースが待っていました。ペシャワール会が「沖縄平和賞」を受賞したというニュースです。ペシャワール会の活動はどんな「平和賞」にも値するとは思っていましたが、とりわけ沖縄出身の私としては素直に喜びました。また授賞式の時の中村医師の挨拶文を読んで、先生はよく沖縄の現状と人々の心情を理解していたものだと思えて感心もしました。

ラシュトには七月二十七日出発しました。もちろん、その間は完全に通信手段は存在しませんので（もちろんテレビも新聞もなし）、ペシャワールに帰ってきたときは、何か良くないニュースがあったのではないかとか、日本の家族などが心配していたのではないかと思ったりしました。やっと印パの緊張が冷め始めていた頃でしたし、沖縄

の実家の一部からは私の「パキスタンからの即時撤退コール」が時々来ていた程でしたので、さらにそれが強くなっているのではないかと懸念は、「沖縄平和賞」受賞と、私に関する記事も沖縄の新聞に載ったということで吹き飛んでしまったと思っています。やれやれ一安心です。

パキスタン最北部ラシュト診療所

ラシュトですが、行くときは院長代理の藤田さんや日本側事務局の藤野さんも一緒でした。あらかじめ警察に旅程を通告していたおかげか、途中からパトカーが私たちの車を前後に挟んで護衛、先導してくれました。

ラシュトはパキスタンの最北部、アフガニスタンとのすぐ国境近くにあります。たぶん中国のカシガルなどもすぐその所です。ペシャワールからは途中一泊して二日目の夕方に到着するという遠さです。標高は三三〇〇m、周囲はほんとは雪をかぶっている標高五〇〇〇m、六〇〇〇m級の山々に囲まれた盆地状のところにあり、そここそ絶景で天国みたいなところでした（天国だなんて言うとはんとは怒られます。地元出身の看護士ヤールマスディンによれば、貧しくて、大変厳しい環境だそうです。当然です）。

私は以前高山病でひどい症状を経験したことがありますので、少し不安でしたが、案の定初日はどうもなかったのに、二日目にみんなで小高い丘を散歩してきた後から激しい頭痛と嘔吐に見舞わ

れて、症状が出てきました。それからは寝ると頭痛が来て、しばらく深呼吸すると鎮まり、寝て再び頭痛で起きるといふ高山病特有の症状が三、四日は続きました。他のみんなは平気にしていましたので、ちょっと悔しい思いをしたものです。体は慣れるもので、その内私は診療の合間に診療所の周りをぐるぐるジョギングをしていたものです。三三〇〇mでジョギングだなんてプロ選手の高地トレーニング並だなあと自画自賛していました。藤田さんたちが帰った後は、医師の私と看護士のヤールマスディン、地元の世話係のシャラフハ



PMS基地病院にて診察中の仲地医師



PMS基地病院に入院中の患者さん

ーシンの三人だけの職員の診療所です。ラシユトの人たちはとても礼儀正しく優しいが雰囲気の人たちばかりで、安心して診療することができました。診療は午前だけで平均三十〜四十人くらいの患者数で余裕を持って診ることが出来ます。猛暑のペシャワールと違って気候が良いためか、下痢や高熱の患者さんは少ない印象を持ちました。腕の骨折や馬から転落して恐らく肺を損傷した患者さん、昏睡になって回復しない乳児など、重症患者もおり、どうしてよいか迷うケースもありましたが、地元出身のヤールマスディンの協力でなんとか対

応することができました。

午後は水浴びも

午後は急患がない限り自由で、天気の良い日は、十分くらい歩いた所の平原の中にある泉に行き、目の前に氷河を見ながら、水浴びをするのが日課でした。イスラムの国なのでパンツ一丁の裸になるのはどうかと思いましたが、ヤールマスディンによれば、ここはペシャワールと違って大変おらかな地域だから大丈夫というので、慣れた頃から水浴びしながら、近くを通る人に手を挙げて挨拶したりしていましたが、さすがに地元の人たちは不思議そうな顔で見っていました。

食事はほんとに限られた物しかないので、とても質素でしたが、山羊や羊を一頭ごと買ってきてシヤラフハーンやヤールマスディンに解体してもらって、食べたり、鶏を買ってきたりして、楽しく食事することもできました。

めまいがするほどの猛暑だったペシャワールも、ラシユトから戻って見たら、とても涼しくなっていました。私の夏はラシユトで終わりました。また行きたいと思います。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

表紙をめぐる小さな物語語35

ジャネ・ハラーバタム（愛し、わが邪悪）

甲斐大策

「このあたりで降りてくれ。カーブル近くじゃ、二、三回のチェック、バシユトウンにはうるさいんだよ、ふざけやがって、ハラーブ・ザダア（糞つたれ）！ じゃあな。」

ヤワアズイ他五人の男達は、荷台から街道に降りた。冬の到来を示す細長い雲が斜めに横切る空とベイージュ色の大地を分けて赤錆色の枯草が拡がり、午前の陽で古い皮のように光るアスファルト道路が伸びている。

ナンガルハル州出身のドライバーは、何を思ったか水色の飴を十個程ヤワアズイ達に投げると運転席へ戻った。

乾いた音を立てて散った飴のいくつかは割れ、フェロース（トルコ石）のように路面で光る。平然とそれを足下に踏みしだき、ツァーダル（覆布）を頭から肩へ抛り上げる者、ルンギイ（ターバン）を巻き直す者、飴を口に含む者、それぞれ勝手に歩き始めた。

ヤワアズイは、破片を一つつまみ上げ、瞬時眺めて後、舌に載せた。

酷熱のペシャワールから、既に寒気を予感させるカーブル東の野に降り立ち、二十年、ゆっくり生命をすり減らしてただけか、と竹んてしまったヤワアズイに、その飴が何かを眼覚めさせた。ヤワアズイは、散らばった飴の全てを懐に収めた。荷物は、偉大な詩人サラハンク唄う「ジャネ・ハラーバタム」のカセットが入ったラジカセだけである。

かつてカーブルの人々が、世界のバザール始源地と呼んだ、十九歳まで育ったあのシヨロ・バザールへ帰る、どこまで来たのじゃないか。

シヨロ・バザールは生きているのか、それは神のみぞ知ることである。ヤワアズイは、歩き始めた。

「ああ、ああ、邪悪の地、吾が生命、マン・ジャネ・ハラーバターアム、

ああ、ああ、邪悪の地、お前の生命、ハラーバターイ

この生命もってハラーバタムの地の主に仕えよう、心の全て、捧げよう敬い慕う吾が父へのそれの如くに……。」

ヤワアズイは、高い声調で口ずさむ。

ゆるやかな大地の起伏の彼方に、カーブルの凹凸が見え始めた。

ルビー
紙幣を数えて鼻が痛い

PMS会計事務担当
中山博喜

一年……、私がPMS病院の現地会計に携わるようになってから丁度一年が経過した。病院の会計部屋はセキュリティーの問題などを考慮して建物の地下にある。仕事の内容は一言で言ってしまうと「確認」である。確認で始まり、確認で終わる。その日に何を購入するか、購入された品物の金額は適正なものか、購入過程でごまかしが無いのか、職員への給料の準備、徴収金などの管理、そしてそれら全ての確認について間違いが無いかが確認……。したがって朝の出勤から仕事を終えるまで、銀行へ行くなど特別な用事がない限りは地下にこもってコンピュータと書類との「にらめっこ」に明け暮れるのである。

時折「オメエも、たまにゃ御天道様の前に顔を出さんか」とばかりに体がうずきだす。こんな時は「人間も植物と同じ、光合成」が必要なのだ。などとショーもない小言をぼやきながら日光浴を五、六分。前に日本へ帰国した際、友人達から「お、日焼けして！何かお前もタクマシクなつたな」と言われた。パキスタン、アフガニスタ

ンのイメージがそう言わせるのか、固定観念とは恐ろしいものである。もちろん日焼けどころかさもなくば「色白」に成っていつていてという表現の方が正しいかもしれない。

この仕事をやっているとお金というものを通して、この国の人たちの様々な文化や習慣を見ることが出来る。それは例えば、給料前借の理由や要求の仕方であったり、出張費の請求の仕方であったり、退職時の去り方であったり、自分のお金に対するものの考え方であったり、紙幣その物からいろいろな事が見て取れる。

こちらのお金とはかく汚い。財布を持つ習慣があまり無く、裸銭を持ち歩く人が多いためなのか何なのかは分からないが、とにかくポロポロである。そして結構な割合で「血痕(?)の付いた紙幣」を見る。この紙幣が我々の所にやって来るまで、いったいどんな経緯を経てきたのだろうか。銀行に行ってお金を引き出す際、紙幣は百枚の束になって渡されるのだが、銀行が渡した物だからといって安心は出来ない。渡されたその場で、すぐさま確認作業に入る。確認するポイントは三つ。(1) 本当に百枚あるか。(2) ポロポロすぎ

て使えない紙幣は無いか。(3) 偽札は無いか。

これらの確認事項のうち、(1)と(3)は比較的少ないのだが(2)については頻繁に見つかる。そのような紙幣を銀行員に見せても、こちら側がよほど強く換金要求をしない限り交換してくれない。サササッとセロテープを持ってきて「ペタリ」、これで終了である。この「ペタリ紙幣」はとっても多く、セロテープで修正されているの

はまだマシな方、時には真つ赤なビニールテープだったり、更にはお菓子のおまけに付いていそうな「シール」が貼られていたりする。そのようなお金を持って何か買いたい物をしようとすると、時々「こんなお金じゃ受け取れないな」と断られる事がある。銀行が許してもマーケットは許さないのだ。確認作業の重要性を再認識させられる一瞬である。

大量の紙幣を数え終わった後の手は真つ黒である。この手のままで皮膚をこすったり掻いたりするとタマにはあるがその部分が炎症を起こすと私はあまりにも鼻がかゆくて、この真つ黒な手のままで鼻をはじってしまった。実はこれは現在進行中の話であって、私は今、鼻が痛い……。

こんな見た目ポロポロのお金ではあるのだが、それでも価値としては立派に「お金」なわけで大切に取り扱う必要がある。このお金が病院を動かすし、井戸を掘り、そして田畑を耕すのである。そこに生きる人々のために薬となって命を救い、水となって潤し、食物となって生きる気力を与えてくれる。

以前、私が「ペシャワール会報」に執筆させて頂いた際、「ルビーも無駄にはしない」と語ったことがある。皆様から頂いた善意のお金をけして無駄にしないと。この気持ちは今も同じである。そして、これから先もずっとこの思いを胸に……今日もまた、地下にこもって「確認作業」に没頭する。

……それにしても鼻が痛い。

パイロットファームは 収穫のまつ盛りです

PMSワーカー（農業計画担当）

橋本康範

命の水の音

ドッドドッドドッドドッドッ 井戸水を汲み上げるパイプの重厚なエンジン音が足下から回り一面に響き渡る。程なくして水の流れる音がかすかに、しかし、確実に聞こえてくる。

「命の水」の到来だ。それらはあたかも体内の動き、エンジン音は心臓の鼓動、水の流れば血液の流れのようだ。そうなのだ、この水はまぎれもなく、命の水なのだ。小高い丘に通称「D-1」と呼ばれる灌漑用の井戸（直径5m、深さ約20m）があり、そこから南側、「川下」に位置するPMSのパイロットファーム（試験農場）のひとつ、約三五〇〇㎡の畑に「命の水」が供給されるのである。

ここはダラエ・ヌール、ブディアライ村。周りには川と呼ぶには悲惨すぎるほど干上がり、石だらけの「川跡」があり、またここ数年耕されず、村人が足を踏み入れることすら忘れてしまったような畑が遠くまで広がる。そんな中でパイロットファームの作物の緑が映える。この風景を周りの

様子と同時に眺めると、実際目の当たりにし、何度見ても未だなかなか素直に受け止められず、とにかく奇跡としか言いようがない。ブディアライ村のパイロットファームではトウモロコシ（Boubar種）、飼料用作物ソルゴー（ハイブリットソルゴー種・ラッキーソルゴーII種）、ブドウ（Keshmishi種・Tor-Gam種）、そしてお茶を栽培している。

カライシャヒ村にあるPMSのもうひとつのパイロットファームは、周りをいくつかの畑に囲まれてはいるが、少し下流に下るとあつという間に乾いた大地に突き当たる。ここではパイロットファームから一・五km上流に行ったところから湧き出す水をイリゲーション用として利用している。この付近ではこの水の争奪戦が激しく、二週間待っても全く水が来ないということもしばしばである。約四五〇〇㎡あるカライシャヒ村のパイロットファームではトウモロコシ（Boubar種・Ghouri種・8025種・3032種・アフガン産ローカル種）、大豆（I-D-400種・V-Khari種）を栽培している。

地元の関心も高く

これらのパイロットファームを中心にPMS-Agriculture project（農業計画）は活動している。現在、当計画では六名のスタッフ（ワリー・現地農業技師、アキルシャール・ブディアライ村パイロットファームファーマー、ラティーフ・カライシャヒ村パイロットファームファーマー、日本にいる専門家として高橋修氏・農業、稲田定重氏・畜産）そして現地日本人スタッフ川口拓真君、橋本）で活動している。



現地スタッフと打ち合わせ中の橋本さん

ブディアライ村のファーマー・アキルシャールはベテランのファーマーらしく、メリハリの利いた仕事振りを見せてくれる。また、ユーモアのセンスに溢れ、ラバール（弦が一七あり、ギターのよいうな中央アジアの代表的な楽器）の演奏家としても非凡な才能を見せる。カライシャヒ村のファーマー、ラティーフは細かい点に良く気が利き、常に最良の結果が出るよう頭をめぐらせる一方、かなりのパワーの持ち主で、これまでに何度も無理だと思われる力技を可能にできた。現地農業技師のワリーは誠実で、何事にも一所懸命、そして



WS P (水源確保事業) 作成の井戸枠で遊ぶ子供

熱い男である。こんな気持ちのいい現地スタッフに囲まれているからこそ、日本人スタッフ二名、時に現地のほうに足を運んでくれる日本人専門家の方々も常に頑張ることができているのである。

幻が現実!

今はどちらのパイロットファームでも収穫に忙しく、同時にその刈り取った作物を家畜用のえさとして保存しておくサイレージの準備に追われている。また、ささやかながら収穫物をみんなで味わい、収穫祭も各パイロットファームで、そ

してダラエヌールのクリニックで行った。そこにはファーマー、ファーマーの親戚、近所の者、そしてPMSスタッフが参加した。また、パイロットファームに関する地域住民の関心は高く、ほぼ毎日のようにパイロットファームに顔を覗かせる農民や村人、実を採って(盗って?) 家に持ち帰る子供や女性、今回作付けた作物の種子を譲り受けたいと申し出る農民などが数多くいる。

吹き抜ける風のさわやかさとそのときささやく木々の葉がなんとも心地よく、大げさに聞こえるかもしれないが、一瞬にして人を神秘の世界へ誘うほどの魔力がここダラエ・ヌールにはある。何もかもが幻かと思わせられる事が何度もある。先日撒いたアルファルファの小さな芽がブディアライ村、カライシャヒ村の両パイロットファームの畑一面に顔をのぞかせ始めた。ダラエ・ヌールでまたひとつの幻が確実に現実になるうとしている。
 “ドッドドッドドッド” 足下から響く心臓の鼓動が…… “ドッドドッドドッド”。

▼お願い▼
 *ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙の、皆さまの住所・氏名が判読できないことが時々あり、処理に苦慮しております。ご住所・ご氏名はできるだけ分かりやすくご記入頂ければ幸いです。
 、、、
 ▼未使用の切手、ハガキを!▼
 *会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(古切手は扱っておりません)

2001年度診療実績 (各診療所別) …… 前号72号の年度報告にて掲載できなかった分です

	血液	尿検査	検便	らい組 織検査	マラリア・ リーシュマニア	髄液検査等	抗酸菌	その他
コーヒスタン診療所	13	26	15	0	6	0	10	0
ラシュト診療所	6	24	28	0	8	0	0	0
ダラエ・ヌール診療所	2055	1780	2697	0	4425	0	134	38
ダラエ・ビーチ診療所	1624	1565	3564	2	2751	0	218	323
ワマ診療所	932	904	1868	53	2281	0	215	24
カラ・エ・ザマンハン診療所	2206	1961	2288	0	5395	0	151	258
ダシュテ・バルチー診療所	1674	1738	2770	13	1634	0	155	167
カルガ診療所	1066	1914	2975	0	924	0	49	81
ラフマン・ミナ診療所	547	354	1156	0	780	0	0	67
チルストーン診療所	491	364	600	0	172	0	0	0

青空と砂ぼこりの日々

PMSワーカー(駐ジャララバード事務所)

長嶋 透

奥地まで出向いて給与を手渡し

ジャララバードの朝は早い。目覚し時計の針は六時半にセットしてあるが、六時前にはたたき起こされる。スタッフハウス(宿舍)の近所に住む人達に毎朝水を配るために、六時ごろからホースの水をわたるのだが、ほとんどが子供のため、鉄のゲートをたいて催促したり、大声でわめきながらチヨキダール(門番)に声をかけ「早く水を頂戴!」と言っているらしい。以前は夕方に配っていたが、洗濯の時間と重なるので、私が頼んで朝へと時間を変更した。私の部屋は通りに面しているの、毎朝このとおりである。

朝食を摂り、支度が済むと車が迎えに来る。徒歩でも五分くらいところに事務所があるのだが、安全確保のため外出は常に車、もしくは一人以上の現地スタッフと共にである。特に私の場合は会計担当ということで、常時お金を携帯しているため、半年経った今でも歩いたことは二度だけ、一人で歩いたことは一度もない。もちろん休日もある。そのかわり、各所にある井戸掘り現場での

現地労働者たちへの給与の支払い時には、こんな奥深い場所にまで入っていくのか、と思うほどのところまで行って皆に給与を一人一人声をかけながら手渡ししている。そんなわけで、一人で宿舍の外へ出たくなるほど、興味をそそるものはこちらにはない。

重要事項はあえて分担

七時四五分から始業前の話し合いが始まる。前日までの報告、今日の予定、などを各部署の責任者が集まり共通の認識で仕事を始める。これを始めて以来、各部署の動きが見えるようになったことが一番の収穫だと思う。

八時からは通常業務が始まる。まあ大体話し合いが長引くため、毎日十五〜二十分は遅れるのだが、私が席につかない限り一切お金が動かないため、皆私を待っている。おもむろに金庫から金を出し、九月からアチンの作業地から引き抜いたハニフラ技師(三十一歳)に今日の予算を手渡し、業務が始まる。各部署より数人が精算や請求のために会計室に入ってくる。

ハニフラ君はまだ慣れていないために少しずつ仕事を与えているが、私などよりもよっぽど頭が良く、全てを教えてしまうことに多少不安がある。私が思うに、重要事項は一人の人間に集中させず、何人かで分けて保持させるべきだろう。そんなわけで、ハニフラ君は時々ひまで、かわいそうである。会計業務には時間の波があり、適度にバラけていないため、予定が立てづらい。私は給与部分とお金の管理出納を受け持ち、彼には当日の窓口



アフガン人スタッフに給与を手渡し長嶋さん

をさせている。以前は一人で全て私が行っていたので、頭の中がぐちゃぐちゃになっていたが、最近は大いぶ楽になった。

休日は……ただ休んでいます

十二時半から昼食と昼休みになり、山盛りにももらった米のご飯をいただいている。食事は床に腰をおろし現地スタッフと共に車座になって食べ、食後はすぐ横になって寝る。スタッフたちは思い思いの場所へ行き、お祈りしたり寝転んで休

んだりしている。十三時半より午後の業務が始まり、十六時にて終了。その後、午後の話し合いにて今日の報告、明日以降の予定や問題点などの検討をする。長いときは一時間半以上にもなり、かなり話し合っているつもりである。

NGOの仕事とは何かを 考えています

WSP（水源確保事業）担当

目黒 丞まむろ

「ソビエトが攻めて来たときと同じだ…」

日本の皆様、お元気でしょうか？ ジャララバードのスタッフ一同、皆様の変わらぬご支援の下、日々がんばっております。

空爆開始より一年が経ち、表面的にはアフガニスタンの状況は落ち着いてきたかのように見えますが、人々の心は傷ついたので、不安感・不信感が募りつつあるように見えます。

アルカイード捜索のための米軍機は我が物顔に飛び回り、銃を構えた米兵を乗せたジープがジャララバードの街を巡回するようになりました。九月三十日にはトルコ軍の兵隊を乗せたジープが十数台もジャララバードに姿を見せました。

私も偶然、街に出ているために迷彩色のジープ

終わると会計を閉め、宿舎に戻って夕食の支度始める。毎日のメニューは前日の食後に大体決め、朝にチョコケダールに買い物などを頼むようにしている。

食後は自室で残りの仕事を片付け、終われば横

の一人を見る事ができました。黒い覆面にサングラスをかけており、重機銃を握り締めたトルコ兵にとってジャララバードの街に来る事は敵地か占領地に来るような気分だったので、私から見ても緊張しているのが伝わってきました。事前には一切の情報がなかったためISAF（治安維持軍）としてジャララバードに来たのかどうかわかりませんでした。

そばにいたエンジニアの一人が「ソビエトが攻めて来たときと同じだ、あの時もいきなり兵隊が乗り込んで来た……」と私に言いました。人々も同じ気持ちだったのでしょうか。その光景を見ていたジャララバードの人々の顔には恐怖と不安が浮かんでいました。現在のアフガンにおいてハリジイ（外国人）という言葉は侵略者を指すかのように感じます。

ハリジイ（外国人）としての節度

我々PMS（ペシャワール会医療サービス）にもジャララバードオフィスだけで日本人ワーカーというハリジイが六人います。ありがたいことに、私がアフガンに来てからの二年間は、PMSを狙って攻撃された事はありません。その理由は我々が他の外国人たちと明確に違う集団だったからで

になり寝る。時間は決まっていらない。休日には（最近取れるようになった）、休んでいるだけである。

私にあるのは、切り取った青空と砂ぼこりだけである。

我々と他の外国人（他のNGOやジャーナリスト、外国人兵士）との違いはアフガン人とアフガン社会への接し方、関わり方、そして姿勢だと思います。接し方、関わり方、姿勢というのは言葉にするのは簡単ですが、実際に現地で活動する日本人ワーカーが適切な振る舞いを身につけるのはとても難しいことです。

二年前に私がアフガンに入った時も当時の責任者だった蓮岡君に「まだお前はアフガンについて何も知らない。今のお前がエンジニアに指示すると邪魔にしかならない。一切の口出しをするな。先ずは自分が役立たずだということを実感しろ。アフガン社会を知って、雰囲気をつかめるようになるまで質問と挨拶以外はできないと思っていろ」と言われました。

日本で友人だった彼の言葉には驚かされましたが、今になって考えるととても適切な意見だったと感じます。我々ハリジイはアフガン社会にとって理由はどうあれ異分子には違いないのです。

現在、たくさんのNGOが活動しています。海外からのNGOはテロ以降になってから大幅に増えました。大半の外国人ワーカーは一生懸命になって何かをやるうとしているのですが、私から見てアフガン社会にはそぐわないものがほとんどで

す。というより、アフガン社会をまだ理解していないのでしよう。欧米とは価値観が全く違います。去年のテロの直後に取材に来た日本の大手新聞社の記者に「識字率の低い連中と仕事をするのは大変でしょう？」と言われ殴りたくなった事があります。確かに識字教育は大切です。しかしそれが人間性を測る基準にはなりません。

アフガン北部でNGOが作った女学校が焼き討ちされたという報道を聞きました。私には地元での理解を得ずにやった結果だとしか感じませんでした。タリバン政権ですら女性の識字教育は必要だと言っていました。

「識字教育は絶対必要。だけど……」

以前にタリバンの僧侶と井戸の交渉を行ったときに出た話ですが、「字が読めなくてはコランも理解できない。識字教育は絶対に必要だ。だけどその前に治安が安定する事と最低限の生活水準を保証することが必要だ。ミスター目黒はイスラム教徒じゃないから知らないと思うが、娘に字を教えるのは父親の大切な義務のひとつだし、もし妻がコランを読めなければ夫が責任を持って字を教えるのも義務の一つなんだ」と言っていました。

我々は、地元の責任者と交渉して理解を得てから作業を始めることを最重要視しています。きちんとした関係を作れば焼き討ちなどには遭いません。

ドラエ・ヌールにグラムモハマッドというレイバーがいます。レイバーとは月給制の正式スタッ

フとは違い、現場で雇用する作業員で日当契約です。彼は働き者で正直、体格も大きく、難しい井戸があると私が彼に依頼して特別派遣してきました。現在はクリニック増築の現場で責任者であるエンジニアのアシスタントとして働いています。他のレイバーを引っ張るリーダーシップもあり、責任感もあるので、エンジニアにも好かれていきます。

彼を正式スタッフのサイトエンジニアとして雇用しようかと考えた事があったのですが彼は読み書きができずレポートの作成ができないため実現しませんでした。

その時に彼は「あなた達からもらった給料で俺は家族を支える事ができているし、子供達は安心して学校に行き始めた。俺が字を読むことよりも子供に勉強させる方が俺にとっては嬉しい。何より俺は日本人といっしょに働くのが嬉しいんだ」と言いました。

アフガン人はとても誇り高い人々です。彼に対して字が読めなくてかわいそうと思うことは失礼であり、彼の誇りを傷つける事になります。

アフガン人と接して彼らの考え方を知ること、その上で必要な物が何なのかを考える事が一番大事なことだと思います。仮に識字教育を始めるとしても、どのような形であればアフガン社会に受け入れられるのか、考える必要があります。

涸れた井戸を放置

最近、NGOにできることとはなんだろうかとよく考えます。我々は二年程で八〇〇本以上の井

戸を掘りました。この数字は確かに大きなものですし、他のNGOでは不可能と言ってもいいでしょう。しかしNGOが去る時には何が残るのでしょうか。我々は去るつもりなどありませんが、他のNGOが作った井戸を見ていると余計に考えさせられます。

完成した後は放置され一切のメンテナンスもされず、水は涸れてしまいポンプも壊れたままの井戸が無数にあります。井戸には作ったNGOの名前が残されており、看板が立っているものまであります。涸れ果てた井戸に名前が残ることを恥と感じないのだろうかと思えます。

我々PMSの井戸も涸れます。ウォーターポンプで深く水深を取っている井戸ですら涸れています。九月末の時点ではソルフロッド郡の井戸三二二本のうち五七本で水位が下がり使えなくなっていました。既に一度は完成した井戸なので一ヶ月もかからずに掘り直す事はできません。しかし掘り直しをいつまで続けることになるのだろうかと思うと悲しくもなりました。アフガン人達のNGOへの依存体質を作ってしまったていないか、とも思いました。

そんな時にソルフロッドのバラバグ村から連絡が来しました。「涸れた井戸の掘り直しでポンプを使わないで欲しい」と言うものです。この連絡には驚きました。

中村先生の『医者 井戸を掘る』の最後に部分に書かれている村ですが、我々がソルフロッドでも一番苦労した土地です。以前のバラバグ村は井戸が掘れない土地として有名でした。海外NG

2003年 ペシャワール会 カレンダー 予約開始

「天馬訪れる大地」

画・甲斐大策氏

1500円（税・送料込み）

毎年恒例となっておりますペシャワール会の特製カレンダーの注文受付を開始いたします。絵は今回も、会報表紙画の甲斐大策さんによるものです。本年は事務手続きの煩雑を避けるため、下記の要領でご注文下さい（同封チラシに注文票あり）。

【ご注文方法】

- 1) 同封のファクス申込用紙、もしくはハガキにて数量を明記の上、お申し込み下さい。
(fax 092-731-2373)
- 2) ご注文は勝手ながら11月30日をもって締め切らせて頂きます。

【注意事項】

- ・カレンダーが出来上がり次第、郵便局の専用振込用紙を同封してお届けいたします（＝代金後払い）。
- ・整理の都合上、代金の先払いはお断りしております。
- ・電話でのお申し込みはご遠慮下さい。
- ・ご注文など、楷書で分かりやすくお書き下さい。
- ・カレンダーの委託販売は行いません。
- ・ご注文が殺到した場合、先着順にてご注文をお受けいたします。予めご了承下さい。
- ・お問い合わせは事務局（092-731-2372）までお願いいたします。

〇が入るようになりボーリングでなら井戸が掘れるようになりました。しかしボーリングの井戸はポンプが壊れると水を汲み上げる事はできず、枯れてしまっても手で掘りなおすことができません。バラバグ村の人々は時間がかかっても手で掘って作った井戸ならば掘り直しができると、ポンプがなくてもロープで水を汲み上げることができると知ったのです。自分達で維持するにはどうしたらいいのかを学んだのです。

「これこそがNGOの仕事だ」

アチン郡では完成した井戸を住民に引き渡しています。現在の規模ではアチンでの維持作業が困難なので、完成と同時に村の長老会に道具を渡し、維持の責任を引き継いで来ました。

この引渡しは住民にとって、「PMSは撤退しようとしている」と受け取られる可能性もあります。今の能力では維持しきれないので、数年後に

必ず戻ると言っても、外国人の口約束の軽さをアフガン人はよく知っています。逃げ出すというように受け取られるのではないかと危惧していました。

しかし彼らの反応は全く違いました。

ある長老から「今までに色々な組織が来た。NGOも国連も来た。しかし彼らはよくわからないような仕事を少しだけして看板を立てて去っていった。宣伝する為にならなくて去っていった。宣伝する為にならなくて去っていった。あなた達は井戸の掘り方を教えてくれた。完成するまで手伝ってくれた。完成したら道具まで置いていくと言う。後は我々でできる。学んだ事を他の村人や子供達に教えていける。あなた達の仕事は正しかった。これこそがNGOの仕事だ」と言われました。

「これこそがNGOの仕事だ」という言葉は、バシユトゥー語では「ダ NGO カール デイ」と発音します。この部分に彼が力を込めて私に言

いました。

我々は、現時点で必要な飲料水を確保するという事業を通して、少しずつでも大事な希望を与えることができたのではないのでしょうか。自立できるという希望、ハリジイという異分子に頼らずとも生きていく希望。たった二年しか経過してない若僧が希望を与えるなんておこがましいことですが、戦後の荒れ果てた日本が祖父や父母の代がどのように苦しんでどのように作ってきたのかをアフガンの人々に伝えたいと思います。

外国の援助に頼るのではなく、誇りを持って自立して欲しい。

私は戦争を知らない世代ですが、アフガニスタンで戦争によって生み出されるものを知りました。憎しみが生み出すものの悲惨さを知りました。日本支えてくださる多くの方々の気持ちも同じだと思っています。

これからも変わらぬご支援をお願いします。

今こそスタッフの 基礎トレーニングを

PMS院長代理・看護部長 藤田千代子

スタッフも揺れた一年

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。

今年はいつもの夏のような激しい日照りが少なく珍しく風が吹く日が多く、八月は殆どどんよりとした天気で日照時間がとても少なく感じました。それでもベシャワールは雨は数回しか降らず今に至ります。

昨年の今ごろは十月七日に始まった隣国アフガニスタンへの連夜の空爆にカーブルで働くクリニククのスタッフや食糧配給作業をしているスタッフの安全を願う毎日でした。あれから一年たった今でもこちらの新聞にはアフガニスタン内での空爆や部族同士の紛争、米軍基地の襲撃などが週に数回出ています。PMSでは、北部同盟側の政府職員が多数を占めるカーブルへ家族を移す職員や退職者が続々と出ましたが、数名の候補者を残しやや落ち着いて来ました。殆どが非パシクトゥン(族)のアフガン人スタッフでしたが、約三十名退職しました。病院の近くにある二つの大きな

アフガン難民居住区カッチャガリとナーシルバークから、いわゆるアフガン難民と呼ばれていた人達が消え、土レンガで立てられていた住居はパキスタン政府の計画によって見事に潰され、すっぽりとなくなり広大な砂漠のようになっていました。

私達のスタッフの多くのアフガン人は、ベシャワールでは親戚の二家族で家を借りて家賃を折半し、仕事で男性が不在の時お互いに助け合って生活しています。片方の家族がアフガンへ帰る事になり困った人もいます。またアフガン人学校が閉鎖され子供の教育に困りカーブルへ引越す人もいます。退職の申し出があると、特にここでナースのトレーニングをしたスタッフには愛着もありましたので残念に思えました。しかし彼らの殆どがカーブルのクリニクや病院で働いている様なので、ここでのトレーニングがアフガニスタンで生かされているかと思うと最近では嬉しく思えるようになりました。

診療の質

こんな中で様子を観察しながら、人員を多く補充することなくパキスタン側クリニクやアフガン側クリニクでは診療が続けられました。検査技師やナースは以前のように三ヶ月に一回クリニク勤務というローテーションが今ではクリニク勤務が当然のように一ヶ月おきになっています。しかしクリニクでも病院でも診療の質の改善の必要が最近や感じられるようになりました。

先月は医師やナースが少し気をつければ何とか助かった死亡患者が二名いました。他の病院へ転

送するため患者が庭で病院の車の準備を待っている間に死亡してしまいました。病室を出る寸前まで酸素吸入をしていたのを退室と同時に中止にしたのです。又、下痢を一日数十回している乳児の母親が、心配のあまり下痢を止める為麻薬のような薬剤を(民間療法で使われているらしい)飲ませてしまい乳児が昏睡状態になってしまいました。翌日母親は昏睡から醒めかけた乳児をドクターの説得も受け入れず強引に連れて帰り後でその子供は死亡したと知らされました。ドクターは以前より下痢の回数は減って来ていた、死亡する時期ではなかったと言っていました。クリニクでは頭部裂傷の患者の縫合を医師ではなくベテランナースでもなく、トレーニングもまだ受けておらず持針器を手にした事もない手術室勤務の看護士の訓練生が行っており驚いてしまいました。

「これがこの国の現状なのだ」

これまでの驚きと怒りを事務長に話すと「パキスタンの公的病院ではこんな風景はいくらでもある。日本のメディカルワーカーとパキスタンやアフガニスタンのワーカーはずいぶん違う。第一パキスタンでは一旦病院が退院と決めたその時からいくら重症でも患者や家族は酸素や車両など必要な物は全部自分で準備しなければならぬ。病院の庭には死にかけた患者が数人座って診察を待っているのは良く見かける光景だ。私達はベシャワール会のポリシーで重症患者には車両を出したり酸素吸入をしながら移送しているが、パキスタンの公的病院の実態はこういうものだ」。

話を聞いていて思い出しましたが、確かにハンセン病の家族検査に行っていたスワットやデーリ地方の電気やガスのない山村では（時には市街でも）、らい診療所員や看護師たちが「ドクターサーブ」と呼ばれ診療行為をしていて診療所を開いている人もいました。いろいろ問題は感じたものの、医者のいない地域で彼らは住民に頼りにされていきました。

八月にチトラール北部にある私達のラシユト・クリニクに行きました。医師は毎月交代で勤務しましたが、ここ三年程はナースは主に地元出身のスタッフにまかせっきりのような感じでしたので、当然と言うか、やはりスタッフがドクターサーブと呼ばれるので、彼が診断して薬剤を処方している所を見かけました。

余談ですが久しぶりに見たラシユトは馬でクリニクまでたどり着いていた所がジープに代わり、夜間のみ送電も始まっていて、ランタンで過ごした事が懐かしく思われました。

今こそ基地病院での教育が重要

昨年からカーブルのクリニクや食糧配給、マラリア診療チーム派遣などアフガニスタンの緊急作業に没頭していましたが、緊急な活動が終わりアフガニスタンでの飲料用、灌漑用井戸掘りとそれに伴う農業復興計画、医療活動等長期的活動が続けられ、退職して行くスタッフの間隔も開き一息ついた今、ラシユトやドラエ・ヌール・クリニクなど山岳地域にあるクリニクを見ると、基地病院であり教育の場でもあるPMSの存在の重

さを再認識します。現在の病院の建物に移る前に、私達が一般の住宅を借りてハンセン病の診療を行っている頃に見学に来た事のある人が現病院へ再び訪れると決まって「すごく立派な病院になって、スタッフも以前よりしっかりして見える」と褒めてくれますが、それは見かけだけであって先述のような事が簡単に起きてしまうのです。この建物が出来る前に中村先生が「建物は貝の殻みたいなもんだい、中身がないとね」と良く言っておられたのを最近良く思い出しています。まだまだトレーニングと経験が必要に思われます。

必要なのは最低限のこと

ここでは決して日本のような水準の高い看護を求めている訳ではなく、最低限必要とされる事をスタッフに求めていると思います。ハンセン病患者のケアや検査も取りあえずは定着して来ていますが、質の向上が求められています。幸いに今年夏から検査室に日本人検査技師が加わり、また今年十一月に看護師一名、来春は二名の医師が日本から派遣されてくる予定になっています。私達多くのワーカーは、初めの内は何も出来ない気がしたり、現地のスタッフが何でも出来るように見えたりして、自分が本場にここに必要なのだろうか、ここで何の役にたっているのだろうか、何の為に自分はここにいるのだろうかと思ったりします。現地のスタッフを嫌いになりもします。

ここにきて数年してから気がつきましたが日本人スタッフが一緒に働く事で（その存在だけでも）現地はかなり士気が高まります。私達も現地のス

タッフからいろいろな刺激を受け学ぶ事も多くあります。それをお互いに診療や看護行為に還元できれば良いと考えています。

希望に溢れる村々

七月にはドラエ・ヌールの灌漑用井戸や飲料水井戸、試験農場を見に行きました。写真では数え切れないほど見ていたのですが実際に見る直径五メートルの灌漑用井戸とその周りに広がる農園は、その又周りに広がる砂漠化した広大な土地の中にあるオアシスのようでした。

掘削中の他の灌漑用井戸は丁度四メートルを越した所でした。その井戸掘り作業の責任を持つエンジニアや掘る人又その周辺に住んでいて毎日作業を見に来ているというババ（おじいさん）達の表情が、期待感にあふれていたのが印象的でした。周りの畑はカチカチに乾燥しひび割れ木は立ち枯れていましたがそこには明るさ（この表現はびつたりではない、もっと希望がたくさんあふれているような感じ）がありました。最近、ドラエ・ヌールで農業計画の作物を担当している日本人の専門家の方の話では、試験農場の一部では水が行き過ぎて根腐れがおきているのでうまく水を使えば今の倍の畑に水供給が出来るそうです。

アフガン空爆と政権交代に一つの転機を迎えた「緑の大地計画」を進めるジャララバード事務所は、スタッフや作業地域住民間、その他に起こる多くの問題を一つずつ解決しながら着実に確実に進んでいます。

どうぞこれからもご支援をお願い致します。

*「緑の大地計画」試験農場レポート

魅力あるパイロット

ファームを目指す

半年間の成果と今後の取組

農業指導員 高橋 修

(一) 技術的な確認事項

今年の春「緑の大地計画」の核としてパイロットファームがスタートしたが、この半年間はまさに手探りの状況で経過してきた。しかし今回の訪問で、おぼろげながら技術的な課題とか改善の方向が見えてきたように感じている。列記すると次の通りである。

①当初、パキスタンから導入したコーン四品種の内の二品種、豆類二品種(二種類)、日本から導入したソルゴー二品種の内の一品種は地域適応性が確認できたので、今後一般農家への普及に努めていく。今後、今秋播種したアルファルファ、イタリアンライグラスとともに、コーンの四月播き品種、大豆の大粒品種及び甘藷の種芋を新たに日本から導入して適応性を検討する。

②灌漑用水の制約によって、栽培農地が限られているに係わらず意外に土地利用率が低い。例えば五月中旬に麦刈り後七月一日前後にならなければコーンを播かない等である。理由は中途半端な

時期の播種はコーンが実らないとのことである。ローカル品種の特性によるものと考えられるので、日本で専門家と相談して四月播き品種を導入し、更に麦間播種方式で土地利用率を高める技術を試みる。

③ラッキースルゴーIIの高収量性が確認できたので、来年は四月播として年四〜五回刈りを試みる。(今年七月月上旬播種で年三回刈り)なおこの構想はブディアライ村のパイロットファーム担当農家のアイデアに基づくものである。

④ブドウについては、圃場と定植区画も確定したので、穂木の提供者及びPMS病院の庭師と十分連携しながら、穂木の保存、挿木時期等技術的な判断を誤らないよう注意しながら着実に準備を進めていく。

⑤茶については失敗と困難が続いている。特に硫黄華によるpH調整効果の発現が遅れている。専門家によればもう少し時間がかかることであるが、未熟有機物の施用、pH7井戸水による灌水、耕耘による硫黄華と有機物の分解促進、ほうれん草と小松菜栽培による石灰分の吸収除去、両野菜に対する硫安、硫加の施用等、pH低下に向けてあらゆる手段を講じていく。

また、茶苗提供を約束してくれているパキスタンの農業研究所と、機会を作って連携を深めるように努めていく。

⑥過剰な灌水による用水の浪費に止まらず発芽・生育障害が発生している。特にカライシャヒ



PMS試験農場にて指導中の高橋さん

村のパイロットファームの豆類において著しい。このため今後、パイロットファーム担当農家に対して適正灌水量の指導を徹底するとともに、原則的に豆科作物は畦立栽培で、また稲科作物は平畦栽培で対応する。

⑦一般に耕土が十〜十五pHと浅く、根の伸長を妨げまた早魃被害を助長している。特にトラクター耕起の圃場が浅いように見受けられる。今後浅耕と深耕との比較展示等によって深耕の必要性を啓蒙していく。

⑧土壌中の有機物が極端に少なく、低収量と早魃被害の一因となっている。家畜飼料の確保で一杯でありまた畜糞の燃料化によって有機物確保が困難な情勢にあるが、パイロットファームでの比較展示等によって有機物施用の効果を啓蒙していく。場合によっては夏場の飼料が豊富な時期に、緑肥作物の栽培が必要になるかも知れない。

⑨早魃被害の軽減を目的に実施した不耕起栽培

は、生育遅延とか低収等問題があるので、今後は実施しない。

(2) 来春の作付計画

前項の技術的な確認事項に基づいて、来春の両パイロットファームにおける作付計画を協議した。圃場別の栽培計画は下表の通りであるが、節水技術と地力増強対策及び土地の有効利用をベースに置き、食用作物、飼料作物の増収を目標に置きながら、一部に永年作物を取り入れるスタンスで取り組むこととした。

パイロットファームの技術ソースは、中長期的に見て現地の先進事例が最も有益である。ジャララバードからダラエヌールに向かう道中、橋を渡った付近に優れた農業地帯があるので、是非ここで一、二戸親しい農家を作ってノウハウを得て欲しいと橋本さんに依頼した。

(3) 運営上の留意事項

① 来年は「緑の大地計画」の二年目に入るので、少しずつ具体化を図らなければならないと考え、研修の開始及び研修対象者の選定について日本人関係者のみで協議した。

その結果、パイロットファームが魅力のある教材になり得るかどうかが基本であること、パイロットファームが成功すれば必ず一般農家の関心が高まること、その段階であれば適切な研修対象者の選定が容易であること、研修対象者は三十歳代後半から四十歳代が適当であること、を確認し来年度中の研修開始に向けて、当面パイロットファームの充実に主眼を置くこととした。またパイロットファームの技術内容を一般農家に周知するた

め、各圃場毎に技術内容の要点を現地語と英語で書いた看板を立てることとした。看板の内容はMrワリーに案を作らせることとなった。

② パイロットファーム担当農家との契約がまだ終わっていないようである。担当農家の要求(レーバール費、超過時間手当等)がエスカレートする兆しがある(カライシヤヒ村)。橋本さん川口さんはかなり厳しく対応されているが、それにも自ら限界がある。できるだけ早く文書での契約を終わる必要がある。

日当もレーバール費も資器材費もPMSが負担・貸与し、かつ生産物の半分を担当農家が受取る仕組みの中では、パイロットファームの成果が上がったとしてもその成果は普及性に乏しい。担当農家が頑張れば収益が上がる仕組みがないかと考えてみたが、今のところ名案が浮かばない。私としても早急に検討してみたい。現地でも是非ご検討いただきたいと思っている。

終わりに

取り急ぎ報告書を取りまとめたが、欠落とか間違いも多いと思っている。また独断と偏見もかなりあるので是非ご意見をいただきたいと願っている。

終わりに、多くの皆様のご配慮で毎日を楽しみ過ぎてごすことができ、また体調にも恵まれて業務を遂行できたことに感謝を申し上げ報告を終わる。

来春のパイロットファーム作付計画

	圃場番号	面積(a)	作物	品 種	作付時期	備 考
カライシヤヒ村	1	4.7	ソルゴー	ラッキーソルゴーⅡ	来春4月	年4回刈りを目標にする
	2	5.6	コーン	P.F産、日本産	同上5月	
	3	11.2	アルファルファー イタリアンライグラス	ツユワカバ ワセブドウ	今秋10月	混播
	4	3.4	同上	ツユワカバ ワセホープ	同上	混播
	5	5.7	豆類	P.F産、日本産、 インドネシア産	来春5月	詳細未定
	6	7.9				
	7	6.7	小麦 コーン	ローカル種 日本産	今秋11月 来春4月	今秋小麦を条播とし、来春コーンを条間に播種
ブディアライ村	1	6.7	アルファルファー	ツユワカバ	今秋10月	
	2	4.3	小麦	ローカル種	今秋11月	今秋小麦を条播とし、来春コーンを条間に播種
	3	5.0	コーン	日本産	来春4月	
	4	4.1	ソルゴー	ラッキーソルゴーⅡ	来春4月	年4～5回刈りを目標にする
	5	3.4				
	6	4.0	アルファルファー 芋類(ブドウ)	ツユワカバ 甘藷、馬鈴薯	今秋10月 来春3月(来秋11月)	幅1.5mの畦に播種 幅1.0mの畦に植え付け(芋類の後に植え付け)
	7	6.0	アルファルファー 豆類(ブドウ)	ツユワカバ P.F・日本産	今秋10月 来春5月(来秋11月)	幅1.5mの畦に播種 幅1.0mの畦に播種(豆類の後に植え付け)

——中村哲医師の本——

ほんとうのアフガニスタン 1200円

講演・井上ひさし氏との対談を中心に収録した最新刊です

光文社 東京都文京区音羽1-16-6
電話 03(5395)8125

ダラエ・ヌールへの道
【3刷】2000円

ソ連撤退と援助ラッシュ…2002年の今を思わせる激動の記録

医者 井戸を掘る
アフガン早魃との闘い

【8刷】1800円

医は国境を越えて
【4刷】2000円

ペシャワールにて
【8刷】1800円

ドクター・サーブ
中村哲の15年

丸山直樹 3刷 1500円
石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から
1200円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
電話 03(5687)2670

価格はすべて本体価(税別)です

●事務局便り
*アフガニスタンを見てきて「国家」のやるべきことは二つしかないと思えるようになりました。ひとつは、平和を維持すること。もう一つは、民衆を飢えさせないこと、です。アフガニスタンは、七三年の共和制への移行に始まり、二百万の死者と六百五十万の難民を出したアフガン戦争後も内戦が続き、この三十年民衆は人災とも言ふべき戦争と内乱に曝され続けてきました。(さらに大旱魃という天災)。しかしその原因はアフガンそのものにあつたのではなく、常に外部勢力の利害の絡んだ介入にあります。その原因は、イデオロギー、宗教、天然資源、軍事バランスとさまざまですが、その干渉に加えアフガンの伝統的共同体と外圧による近代化の確執が問題を複雑にしてきました。特に昨年の十月から始まつた、アメリカの「カネ(周辺国の買収)と暴力(軍事)」による介入は、アフガン民衆の平和と飢餓の問題をさらに深刻化させることになりました。私たちはアメリカという国に抗すべき手段を持ちませんが、「暴力によって立つものが暴力によって滅びるのは人類史上の鉄則」(中村哲・第一回沖繩平和賞受賞の挨拶)であると信じています。

この一年は形容しがたい一年でした。現地・日本側とも次々と起る事態によって鍛えられ、現地事業

が「我々の事業である」ということを深く自覚させられた一年でもありました。

ペ村から

私が初めて事務局のお手伝いに局を訪ねたのが去年の十月十七日、事務局はさぞかし大変だろうという思いから初めて訪問したその時の印象は強烈だった。足の踏み場もないほど靴が並んだ玄関から短い廊下を通して見える部屋にはたくさんの人がいて一心に何か作業をしている。それも3DKほどしかない空間であつてみれば、二十人入れれば「立錫の余地がない」という形容も大袈裟でない。挨拶もそこそこに手伝わされたのが会報折りと封筒詰め。手を休めることなく黙々と皆さんが作業を続けておられるので、新参者の私もただそれを追うばかり。三時間近く、十月も半ば過ぎというのに汗だくである。正直とんだところに来てしまつたと思つたものだが、その日はちょうど秋の会報発送日で一番忙しい時であつた。しかし、その後も、その日ほどではないにしても、忙しい日々が続き、漸く落ち着いたという気分になつたのは、正直この夏からのように思う。皆さんからお寄せ戴くご好意へのお礼状書きに始まつて、今はパソコン入力のお手伝い。パソコンの画面を眺めるその時々、そこに記録されたたくさんの方のお一人おひとりのお気持ちのありがたさをしみじみ思う。(お)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとられず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎一年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をF A R A H O U S E (〒八一〇〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル三〇七号 TEL七三二―二三七二) 内におく。